

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K16860

研究課題名(和文) 語彙学習における学習者特性の影響

研究課題名(英文) Influence of Learner Characteristics on Japanese Vocabulary Learning

研究代表者

石澤 徹 (ISHIZAWA, Toru)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授

研究者番号：00636095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では学習者の母語、学習スタイル・学習ストラテジーを学習者の特性として捉え、日本語の語彙学習と学習者の特性の関連を検証した。その結果、(1)手で漢字を書いたことがない学習経験3か月程度の韓国語母語話者は、ハングルのようにパーツに分けて覚えようとする様子が見られたほか、韓国漢字の覚え方を援用して覚えようとしていた。(2)日本語学校で学ぶ中上級日本語学習者(母語は中国語、ベトナム語、モンゴル語)は、ルビの正誤判断課題において、語末には視線がほとんど向けられておらず、正誤判断を誤るケースが少なくなかった。この様子には母語の違いによる影響は見受けられなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はコロナ禍の影響もあり、当初想定していた形では実施できなかったが、一方で、時宜にかなう対応をすることもできた。学術的意義としては、学習者が語末のルビに注意を払っていない様子が明らかになったことが挙げられる。今後、視線計測実験と音声知覚実験を組み合わせ、学習者の文字と音の連合について、またTOPRAモデルと音韻符号化能力の関連性について検証を行っていきたい。一方、社会的意義としては、ルビを用いることと語彙指導・音声指導との関係の一端を明らかにでき、日本語学習場面、日本語指導場面に活かせる示唆が得られたことである。

研究成果の概要(英文)：This study examined the relationship between Japanese vocabulary learning and learners' characteristics by considering learners' native language, learning styles, and learning strategies as learners' characteristics. It revealed two things: (1) Korean learners who had studied for three months and had never written Japanese kanjis by hand tried to memorize them by dividing them into parts like Hangul (Korean alphabet) and also tried to memorize them with the help of Korean kanji memorization methods. (2) Intermediate to advanced Japanese language learners at Japanese language schools (whose native languages are Chinese, Vietnamese, and Mongolian) rarely looked at the furigana at the end of words in the task of judging the correctness of furigana; it might be there is no influence by differences in the native language, but we need other investigations.

研究分野：日本語教育

キーワード：語彙学習 適性 母語 音韻符号化能力 フリガナ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、語彙学習において、学習者特性(学習スタイル、認知能力、音声を正確にとらえる力、母語の違い)が学習方略(どのように覚え、どのように思い出すか)に与える影響を検証する基礎研究である。また、学習方略と測定方法(聴覚による再認課題か視覚による再認課題か、筆記再生課題か)の関係性の検証を実施することで、学習者の特性と目的にあわせた教育的介入のありかたについて検討を行う。なお、本研究の成果は、第二言語語彙習得における処理資源配分モデルの検証に新たな知見を与えるものとなると考え、計画を行った。

2. 研究の目的

本研究は日本語の語彙学習において学習者の特性がどのように関連しているか検証するものである。学習スタイルとどのような学習方略がマッチするか(「適正処遇交互作用」)ならびに学んだ時と同じようにテストをすればより高い成績につながる(「転移適切性処理の原理」)ことは、語彙の学習において方法を選ぶときに考えるべきことであろう。日本語学習において、学習する語彙は中級から膨大に増加するが、中でも特に漢字を用いる語彙が増加する。しかし、その多くは学習者の自学自習に委ねられることも多い。また、日本語学習者の中には、漢字を認識できても手で書いたことがないという学習者も大変増えており、いわゆる「書いて覚える」行動が減っている可能性も大いにありうる。

そこで、語彙を学習する際、学習者が持つ特性(学習スタイル、認知能力、音声を正確にとらえる力、母語)がどのように影響しているのかについて、デジタルネイティブ世代の学習者や漢字を書いた経験が少ない日本語学習者を対象に実態を明らかにするべく、探索的に検討を行うこととした。

まずは L2 語彙習得・L2 音韻習得の観点から依拠する理論の検討を行うべく、文献研究を行った。Service and Kohonen (1995)によると、聞きなれない語を繰り返すためには、音韻ストアに音韻表象を形成する能力が必要となり、その能力が学習初期段階の語彙学習を予測するとのことだった。確かに、日本語教育の語彙認知に関する研究の多くは、その音韻の類似性を子音に求めている傾向が強く、アクセントやリズムが母語と違っている点についてはあまり触れられていなかった。音韻といった場合に、リズム・アクセント体系がどの程度影響するか、より詳しく確認していく必要がある。

一方、語彙習得のモデルとしては TOPRA モデル(Barcroft, 2015)が挙げられる。TOPRA モデルは、語彙学習において、形式・意味・形式と意味のマッピングに処理資源が割かれると考えられているが、限られた処理資源であることから、形式が複雑であれば、意味および意味と形式のマッピングに十分な処理資源を割くことができなくなる可能性が考えられる。また、形式面は文字だけでなく音韻も含まれると考えられるが、日本語の場合、アクセントやリズムが他の言語とは異なる体系のため、処理資源が割かれる可能性が高い。この点については、研究を進める中で TOPRA モデルの提唱者である John Barcroft 氏からコメントをいただくことができたが、Barcroft 氏からもリズムやアクセントといった点についてはモデルの見直しを行う必要があることが指摘された。

日本語学習者の場合、促音や長音といったリズムにかかわる日本語の特性において、聞き誤る傾向がある。Skehan(1998)は音韻符号化能力の影響を指摘していたが、特に母語(漢字圏か非漢字圏か)の違いによる影響は、リズム・アクセント体系の違いにつながっている。

以上を踏まえると、一点、疑問が生まれる。日本語学習では、読み物などに新出語彙がある場合、漢字で表記したうえにふりがなを振って示すことが多い。この際、学習者は文字と音韻を適切に結びつけているのだろうか。これまで述べてきたように、学習者が語彙の処理を行う場合、形式と意味、また両者のマッピングを行うわけだが、そもそも新出語彙の読み方について、ふりがなを見て確認しているのだろうか。このことに対し、日本語学習者の実態を明らかにするべく、調査を行い探索的に検討する。

3. 研究の方法と研究成果

本研究では、2件の調査を行った。本研究はコロナ禍による中断・変更を余儀なくされた。第1の調査はオンラインで回答を集め、第2の調査は日本国内の日本語学校にて対面で実施した。

(1)日本語学習経験の浅い学習者は漢字を覚えようとするとき、字形のどこに着目するか

日本語学習経験が浅い韓国語母語話者(韓国在住、日本滞在経験なし)を対象に、漢字の字形認識に関して、オンラインで調査を実施した。協力者は韓国の大学で日本語を学ぶ学習

者で、学習歴は3か月程度、ほとんどの学習者が手で漢字を書いたことがなかった。学術共通語彙で用いられる漢字の中から、画数が多いものを選び、「どこに注目すれば覚えやすいか」「どこが覚えにくいか」「どのように説明すれば、この漢字を知らない人が覚えやすくなるか」について母語で記述してもらった。結果、「覚えるために注目する箇所」について、学習者が同じように着目するわけではないこと、同時に、学習者の中でも、いつも同じように注目しているわけでもなく、初級学習者の場合、ストラテジーとして安定しているとは言えないことが示された。ただし、韓国語母語話者という学習者の特性上、ハンゲルのようにパーツに分けて覚えようとする様子が見られた。また、学齢期に漢字の塾に通った者は、韓国漢字の覚え方を用いていた。今後は、実際に視点で注目しているところと説明とが一致していたかを検証するとともに、語彙としての記憶や表出の際はどうか、また、音韻との関係について明らかにすることが必要である。

(2) 学習者は漢字とふりがなが共に呈示された際、どのように視線を向けているか

学習者が呈示された情報にどのように注意を向けるのかについて視線計測実験を行い、視線の停留の観点から検証を行った。協力者は日本語学校で学ぶ中国語母語話者、ベトナム語母語話者、モンゴル語母語話者であり、N2程度のルビ付き漢字語彙をターゲットとして、語の発音、文の音読、ルビの正誤判断といった実験を実施した。その結果、ルビの正誤判断課題においては、語中には視線が停留するものの、語末には視線がほとんど向けられておらず、正誤判断を誤るケースが少なくなかった。これは母語の違いによるものではなかった。

TOPRAモデルでは、学習者の処理資源は一定であり、処理する情報によって処理資源の割り当ては変わると述べている。TOPRAモデルでは、意味に注意を向けると形式に注意が向かないと考えられているが、形式の情報量の多寡については言及されていない。漢字だけでも形式処理は負荷がかかるが、音韻情報をかなで提示することで、より負荷の小さいほうに注意を向けてタスクを達成しようとするのはいたって自然なことだと言える。しかし、語末の長音の有無については、ほとんどの学習者が注意を向けていなかった。これは、音韻として語末の長音が認識できないことによるのか、そもそも語末は注意を向けていないのか、判断できない結果であった。今後追検証を行い、音韻符号化能力等、母語以外の学習者特性についても、引き続きアプローチする。なお、学術共通語彙の中からターゲット語彙を選んだため、学習者にとって既知のものであったかはわからない。この点でも、追検証が必要である。

謝辞

ご協力くださった皆様に、感謝申し上げます。

参考文献

- Barcroft, J. (2015). *Lexical Input Processing and Vocabulary Learning*. John Benjamins Pub Co. Amsterdam/ Philadelphia.
- Service, E., & Kohonen, V. (1995). Is the relation between phonological memory and foreign language learning accounted for by vocabulary acquisition? *Applied Psycholinguistics*, 16(2), 155-172.
- Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 石澤徹
2. 発表標題 語彙学習時の学習者は何に注意を払っているかー学習者の特性をふまえてー
3. 学会等名 韓国日語日文学会冬季国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------